

04

SEGでの経験すべてが
今とつながっている
これからも日本中の子どもたちへ
「読書の楽しさ」を届けたい



PROFILE

笹沼 颯太

(ささぬま・そうた)

SEGには高1の夏に入会し、英語多読を受講。2018年3月筑波大学附属駒場高校を卒業後、同年4月東京大学文科Ⅱ類に入学。SEGでは英語多読の講師もつとめ、東大在学中の20年4月、子どもが読書にハマるオンライン習い事「ヨンデミー」を提供する株式会社Yondemyを設立、代表取締役就任。現在に至る。

読書教育サービス「ヨンデミー」で 子どもたちへ豊かな読書体験を提供

古川 笹沼さんは現在、全国の子どもたちにオンラインで読書教育サービスを提供する株式会社Yondemy（ヨンデミー）の代表取締役として活躍されています。ヨンデミーとはどのようなサービスなのでしょう。

笹沼 AIの「ヨンデミー先生」のサポートとゲームのように楽しめるアプリによって、「子どもが読書にハマる」オンラインの習い事です。読み聞かせの時期が終わり、自分で文字を追って本を読む段階をサポートするイメージです。単に文字を追うだけではなく、読書に深く取り組める姿勢と、豊かな心を育てることを目的としています。メインターゲットは小学生ですが、5歳前後から15歳くらいまで、幅広くご利用いただいています。

ヨンデミー先生が一人ひとりの好みや読書レベルに合わせ、その子にぴったりの本をお薦めしたり、ゲーム感覚で読書を習慣化しながら、本の楽しみ方、感想の書き方を学べたりするといったサービスを提供しています。全国の図書館を対象としたリアルタイム蔵書検索と連携しているため、読みたい本をその場で予約し、最寄りの図書館ですぐに借りることも可能です。個人で習い事として利用いただいているほか、最近では学童、学習塾、小学校でも導入され始めています。

古川 活動の幅が広がっているのですね。子どもたちへの影響や効果はいかがですか。

笹沼 嬉しいことに、子どもたちからは「本の感想を書くのが楽しみ」「ヨンデミー先生とだったら本を読みたい」など、楽しく読んでいる様子が伝わってくる感想を多くいただいています。保護者の方からは「寝る前に動

画ではなく、本を選ぶようになって感動している」「親の言うことは拒んでいたのに、ヨンデミー先生のお薦めは読んでくれて、子どもの読書の幅が広がった」という声も。さらに、やんちゃだった子が落ち着いて話を聞いてくれるようになったというケースもあります。

古川 読書は学力面だけでなく、精神面にも良い影響を与えているのですね。

多読で苦手な英語を克服 原著との「出会い直し」も楽しかった

古川 少しSEG時代にさかのぼりましょう。SEGに通うことになったきっかけを教えてください。

笹沼 入会したのは高1の夏で、きっかけは中学から筑駒で一緒だった友人Iくんに紹介されたことです。当時の私は英語が大の苦手で、単語や文法を覚えることに拒否反応が出てしまうくらい嫌でした(笑)。学校のテストでは下から数えた方が早いほどで、そんな私を見て心配したのか、「英語の本を読むだけだから来なよ」と誘ってくれたのです。もともと読書は好きだったのと、学校で洋書を楽しそうに読んでいるIくんが印象的だったこともあり、「それなら通ってみよう」と思いました。

古川 実際に通ってみていかがでしたか。

笹沼 高校生でも最初はOxford Reading Tree (ORT)という絵本のシリーズから始めるため、なんだか幼い印象を受けました。でも、読み進めるうちに読める本の難易度はどんどん上がっていきましてし、いつの間にか英語が苦手だとは思わなくなりました。小学生の頃に読んだ児童書の原著を読む機会もあり、そういった本たちとの「出会い直し」も楽しかったです。特に小学校の頃に大

好きだったThe Saga of Darren Shan (ダレン・シャン)を原著で読めたことは一番の思い出です。

古川 ダレン・シャンは日本でも児童書として出版されていますし、SEGの英語多読でも定番です。今も昔も人気の本ですね。

笹沼 はい。私が英語多読を楽しめたのは、小学生の頃からいろいろな本を読んでいたことが大きいと思います。「読む」という行為自体に慣れていたし、日本語で読んで知っている本が多かったことも、難しい洋書を読むモチベーションにつながったと思います。

古川 クラスの雰囲気はいかがでしたか。

笹沼 男女を問わずに仲が良いクラスでした。SEGで親しくなった方たちとは、今でも集まる機会があるほどです。ヨンデミーと一緒に立ち上げたIくんとSくんは、筑駒の同期であり、SEGでも一緒に学んだ大切な仲間です。彼らとは大学生の時にSEGで共に英語多読の講師もしていました。

子どもの読書離れの解決に向けて SEG出身の筑駒仲間3人で会社を設立

古川 ヨンデミー立ち上げのきっかけとなった出来事は何だったのでしょうか。

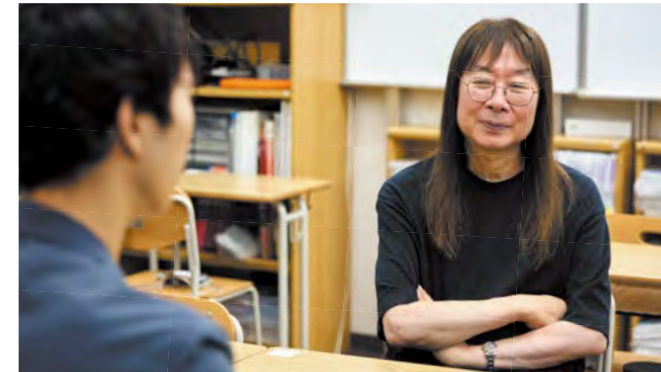
笹沼 大学2年生の夏、アイデアマンのSくんが「夏休み中、暇だからビジネスコンテストに挑戦しよう」と、私とIくんを誘ったことです。3人共通のバックグラウンドである「多読で英語を学んだ」「英語多読の講師をしている」ことを軸としてさまざまなアイデアが出る中、子どもの読書離れの話題からヨンデミーの原型である「読書教育」につながったのです。中高の国語の先生が読書教育専門の方で、「読書を教わる」経験をしていた影響もあります。

古川 みなさん、読書が当たり前だったのですね。

笹沼 はい。3人とも読書が大好きなので、子どもたちが本を読まなくなっていることに対して「この課題を解決したい」という気持ちが強かったのだと思います。また、身近でも読書離れを感じる出来事がありました。当時は家庭教師もやっていたのですが、中学受験を志す小学生に、「全教科困っている」子どもがたくさんいたのです。国語が苦手なのはもちろん、算数は文章問題になると解けない。文章が理解できないから解説を見ても分からない。自分にはかなりショッキングで、その背景にある「子どもの読書離れ」の深刻さを目の当たりにした瞬間でした。

古川 ビジネスコンテストの結果はどうでしたか？

笹沼 コンテストに出したアイデアは「日本語多読（海外の方が日本語を学ぶ手法としての多読）」だったのですが、全然駄目でした（笑）。しかし多読という手法はどんな言語を学ぶ時にも通用するというのは3人とも分かっていたので、「そもそも母語をターゲットにした



方がいいのではないかと視点を変えてみたら、事業としてかなりしっくりきたのです。その頃から本格的に起業の準備を始め、大学3年になる2020年の4月に会社をスタートさせました。起業がちょうどコロナ禍と重なったのですが、振り返ってみると、会社にとっては追い風だったかもしれません。

古川 コロナ禍で一気にオンライン環境が整いましたからね。

笹沼 コロナ禍以前は小学校でのオンライン教育はほぼ行われていませんでしたし、AIと聞いてイメージできる方も少なかったため、運が良かったと感じています。

古川 SEGで英語多読を学んだ経験は、ヨンデミーの立ち上げにどのように役立ちましたか。

笹沼 自分の経験を元に、一番重視して念頭に置いたのは「先生への信頼」です。私は高2から一番上のクラスに上がり古川先生にお世話になったのですが、その頃にはすっかりSEGの先生方を信頼していたので、普段手に取らないジャンルの本でも「自分の好みを分かっている先生がお薦めしてくれるなら面白いはず」と思えましたし、かなり分厚いペーパーバックでも「読めるとして選んでくれたのだから読めるはず」とモチベーションにつながったことを今でも覚えています。

海外にも読書教育サービスがありますが、それらは読み上げ機能やクイズ機能がついていたり、学校向けだと「ほかの生徒がどのくらい読んでいるか」といった統計機能が実装されていたりします。ヨンデミーがそうした先行例を参考にしなかったのは、SEGでの経験があったからです。先生への信頼があれば、それが本を読むモチベーションになります。同じクラスでも異なるレベルの本を読んでいるのが当然で、誰が何を何冊読んでいるかなど、SEGでは知らないのが普通です。そんなSEGの光景は、この事業を立ち上げる大きな後押しになりました。

古川 SEGで英語多読の講師をした経験はどのように活かされましたか。

笹沼 当時は中1クラスを担当しており、中には英語が苦手なのはもちろん、読書も嫌いという生徒が一定数いました。そういった生徒には、とにかく楽しんでもら



生徒として講師として、 SEGで経験したことが貴重な財産に

うしかないと思っていました。そこで、本に隠されている小ネタを紹介したり、分からない言葉がある時は前後の流れや絵を見て推測できることを伝えたりしながら、英語の本来の楽しみ方を教えるようにしたのです。すると、生徒たちは楽しみ方を知らないだけで、その方法を伝えれば楽しんでくれるのだということを肌で感じられるようになりました。そうした子どもたちをどうサポートするか。これは今でも常に意識しています。

AIの「ヨンデミー先生」はSEGの講師経験そのものです。生徒一人ひとりの好みとレベルに合った洋書を選ぶような英語多読講師を日本中に作るのは、難しいのが現状です。しかし英語ではなく日本語の本で、AIなら可能なのではないかと誕生したのが「ヨンデミー先生」なのです。

古川 学校の授業は全員同じ教科書で、同じレベルのものを習います。しかし読書なら、基本的に自分のレベルに合った本を分野ごとに選べるので、苦手な子にとっても得意な子にとってもメリットが大きいですね。

笹沼 本当にそう感じます。導入いただいている小学校では月に一度、保護者アンケートを取っているのですが、先日、日本語が非母語のご家庭からポルトガル

語での回答が届きました。そこには「娘は日本語が拙い。それでもこれだけの本を読めた。とても嬉しい」と書いてありました。記録を見ると、月に100冊もの本を読んでいた。自身の学年に応じた水準の本はまだ読めませんが、着実に読めるようになっていくことが分かり、私も嬉しく思いました。

子どものマネジメント面を大改良して 利用者が一気に増加

古川 会社は問題なく立ち上げられたのですが。

笹沼 いいえ。私たちも起業に関してはさっぱり分かっていなかったで、「プロの投資家に話をもっていこうか」となりました。しかしなかなか理解してもらえず、取り合ってもらえないことが多かったです。人生で一番「お断り」をもらった経験かもしれません。

古川 それは苦勞しましたね。いざ会社として運営始めて、壁にぶつかったことはありましたか。

笹沼 シンプルですが、「子どもは意外と本を読まない」ということです。ただ、SEGで講師をしていた時から、重要なのは適切な本を選んであげることと先生への信頼だと分かっていました。だからそれらを一手に担う「ヨンデミー先生」というキャラクターを初めから導入したのです。最初はそれでうまくいっていたのですが、2年目で突然伸びなくなってしまいました。どうやら立ち上げ当初は、教育熱心なご両親が子どもの読書マネジメントをし、子どもの機嫌を取りながら本を読ませていたというパターンが多かったようなのです。しかしヨンデミーの評判が口コミで一気に広がってメディアにも取り上げられるようになり、利用者層が広がったことで、ご家庭で担っていた部分を自分たちでやる必要が出てきました。そこで、2022年にフルリニューアル。ゲーム感覚で取り組めるようにしたり、ヨンデミー先生に会話機

能を追加し信頼度をもっと高まるようにしたりと、子どものマネジメント部分を補うためのさまざまな仕掛けをほどこしました。その成果が実り、2023年には利用者が一気に増加しました。

もう一つ壁に感じたのは、英語やそろばん、スポーツ、音楽などと比べると、読書を習い事としてお金を払う感覚がないことです。それが当たり前になるまで、時間がかかりました。

古川 さまざまな苦勞を乗り越えてこられたのですね。ただ、読書教育というと、ライバル会社はないように感じます。

笹沼 はい。2025年7月に公表された2025年度の全国学力テスト(全国学力・学習状況調査)の結果を見ると、小中学生の学力が落ちると共に、読書が好きな児童・生徒の人数も減っていました。長文読解が解けない、記述問題が書けない子が多い一方、読書好きの児童・生徒は全教科で成績が良いという結果が出たのです。教育関係者に「子どもには読書が必須」という意識が芽生える中、読書関連事業を行っているのは弊社しかないので、現在は全部のオファーがうちに来るという状況です。しかし、学校への導入も、最初はトライアルのため無償で提供するなど、すぐに収益につながらないのも事実です。書店や出版社と協力して新たなビジネスにつなげたい気持ちがある一方、なかなか踏み切れないのが現状です。

古川 会社経営は想像以上に難しいものですが、その分やりがいも大きいと思います。社員は何名なのでしょう。

笹沼 会社を立ち上げて6年目で、現在の社員数は9名。2026年4月には新卒で5〜6名入社する予定になっており、社員は少しずつ増えています。ちなみに、初期メンバーの8名は全員筑駒出身で、半分はSEG生です。中高時代に築いた横のつながりが、現在の礎になっています。



英語は一生を支えてくれる強い味方 何事も楽しめば、自然と力がついてくる

古川 デジタルではなく、リアルの本を重視しているのはなぜですか。

笹沼 理由は2つあります。一つは、電子書籍化された児童書が非常に少ないこと。名著と言われる作品は古い

ものが多く、電子書籍化に消極的な作者は少なくありません。一人ひとりに合った本を選ぶ際、本当にお薦めしたい本が電子書籍にないケースが多いのです。もう一つは、本を読まない子に読んでもらうには、実物が目の前にあるのが大事だということ。スマホやタブレット端末だと、つい動画サイトやSNSを見てしまいがちです。しかし、実物が机やソファの上に置いてあったら、物語の続きが気になって思わず手に取りたくなるものです。図書館やSEGの多読教室などのように、たくさんの本に囲まれている空間も、スマホなどの二次元では感じられない、ワクワク感に満ちあふれた大切な要素だと思います。

古川 今までのお話で、SEGがヨンデミーの立ち上げに大きく影響しているのがよく分かります。

笹沼 本当にそうなのです。ヨンデミーを立ち上げた大学3年生の4月というタイミングは、ちょうど就職活動が始まる時期でもあります。周りが就活を始める中、私は投資家から資金を調達するために動いていました。その行動は、私にとっては新卒就職の道を捨てるということでもありました。それでも踏み切れたのは、読書教育の必要性を感じていたのはもちろん、事業として提供できるのは多読指導経験者である自分たちだけだと確信していたからです。こうして改めて言葉にしてみると、生徒として、そして講師として、SEGでの経験すべてが現在につながっていると実感します。

古川 最後に、小中高生へメッセージをお願いします。

笹沼 ずばり、勉強は「楽しむ」が一番大事です。私は英語が大の苦手な状態でSEGに入会しましたが、高3の夏に受けた東大模試は文系で現役1位、TOEIC®は970点とほぼ満点。受験で武器になるくらいの実力がついたのです。ただ、「ものすごく頑張った」という実感はあまりなく、「読書を楽しんだだけ」で自然と伸びていった感覚でした。

起業してから特に感じるのですが、この「楽しむだけ」で力がつくのは、勉強をするうえでとても大切です。SEGの英語多読で同じクラスだった方には国際系の大学・学部の志望者が結構いました。それは英語多読を通して「英語が楽しい」という気持ちが芽生えた証拠なのだと思います。みなさんも読書の楽しさを知って、英語という一生を支えてくれる強い味方を手に入れてください。

SEG時代から
大切にしている
こと

“You play with the cards you’re dealt…whatever that means.”
(なんであれ人生は配られたカードの中で戦うしかない)

スヌーピーの本をSEGで読み、出合った言葉です。一見ネガティブな響きですが、「配られたカードの中でどんな工夫をするかを考えるのが大切」など、前向きに生きるための考え方を示してくれているように感じています。

※TOEIC®は、米国Educational Testing Service(ETS)の登録商標です。